

全国盲ろう教育研究会 会報 第9号

2011. 5 発行
全国盲ろう教育研究会事務局

先の東日本大震災で被災された方々、今なお不自由な生活をされている皆様に心よりお見舞い申し上げます。

●全国盲ろう教育研究会第9回定期総会・研究協議会のご案内

開催にあたっては、大震災による甚大な被害、原発、余震、計画停電など、たくさんの方の困難さがありますが、研究会として盲ろうに関する教育実践や情報を発信していくことが、盲ろうの子どもたちや支える方々に対してできることではないかと考え、開催することにしました。参加できない方も、今はそれどころではないという方もいらっしゃると思いますが、盲ろうについての情報を得たいと思っいらっしゃる方、1年に1回の研究協議会の場を心待ちにしてくださっている方もいらっしゃると思います。開催することで「盲ろう」の認知を拡げ、教育や福祉の充実につながるのではないかと考え、できる形での開催を模索しました。

期日：2011年7月30日（土）・31日（日）

場所：筑波大学附属視覚特別支援学校（東京都文京区目白台3-27-6）

内容（予定）：

- ◆先天性盲ろうとして初の大学進学を果たした森君と彼をサポートした担当教諭の奮闘記
- ◆インクルージョン教育の流れの中で 今考えるべきことは
- ◆大震災、その時…
- ◆グループ別ディスカッション

* 近日中に開催の案内を送付いたします。

●全国盲ろう教育研究会第8回定期総会・研究協議会報告

2010年8月8日（日）・9日（月）、筑波大学附属視覚特別支援学校にて、第8回研究協議会を行いました。会場は全国各地からの100名以上の参加者でぎっしりと埋まりました。

「盲ろう教育についての一研究者の考察 ～過去、現在、未来そして日本、世界～」と題した国立特別支援教育総合研究所の中澤恵江氏の講演では、日本および世界の盲ろう教育の歴史と一歩先の未来、日本と世界で展開していることが互いに絡み合っ盲ろうをめぐる大きな動きになっていること、そして、多くの出会いの中で学んだこと、大切にしたいと考えていることなど、歴史を見つめ未来を展望する確かなま



なざしと子どもたちと保護者への温かい思いに感動が広がりました。

「肢体不自由のある盲ろうの子どもたちの教育」をテーマにした、三國勝司氏、金子亜子氏、宮崎広子氏の3氏による実践報告では、子どもたちの課題をしっかりとらえた上での関わり、子どもたちとのコミュニケーション、教室環境などさまざまな実践の報告がありました。

また、8本のポスターが出されたポスターセッションでは、ポスターの前で熱心に語り合う様子があちらこちらで見られました。ワークショップでは見えない・聞こえない盲ろうの困難性を改めて実感したり、日頃の悩みや思いを皆で考えたり、東京都盲ろう者支援センターを見学したりと充実した時間を過ごしました。

2日間の様子を紙面にて報告いたします。

* 講演者、発表者等の所属につきましては、研究協議会時の所属で記載しておりますので、ご了承ください。



●全国盲ろう教育研究会 第8回定期総会報告

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認し、以下の議事案件の審議を行いました。

- ・ 議案 1. 2009年度事業報告
- ・ 議案 2. 2009年度会計報告
- ・ 議案 3. 2010年度事業計画案
- ・ 議案 4. 2010年度予算案

以上、原案通り、了承されました。

●全国盲ろう教育研究会 第8回研究協議会報告

【8月8日】

○講演概要

「盲ろう教育についての一研究者の考察

～過去、現在、未来そして日本、世界～

中澤 恵江 氏（国立特別支援教育総合研究所）

恩師梅津八三、盲ろう教育研究の場を29年間与えてくださっている国立特別支援教育総合研究所、様々な支援者の皆様、一緒にこの研究会をつづけている信頼できる仲間、そして何よりも盲ろうの子ども達とそこご家族、盲ろうの成人の方々との出会いに、心からの感謝を込めてお話をさせていただきます。

まず、日本および世界の盲ろう教育の歴史について年代を追いながら説明いたします。

世界の盲ろう教育の始まりとしては、1837年のローラ・ブリッジマンの教育が開始された年、1887年のヘレン・ケラーの教育が開始された年をあげておきます。その後、ノルウェーを含め、他の国でもいくつかの取り組みが行われます。

日本において、盲ろう教育の始まりから養護学校の義務制までを追っておきますと、1949年に山梨県立盲学校において2人の盲ろう児の教育が開始され、1952年には、三上鷹麻呂校長の友人梅津八三東大教授が参加し、1970年まで理論と実践を行き来しながら行った盲ろう教育のなかで、梅津の行動体制と信号系活動の理論が展開され、日本の盲ろうおよび重複障害教育研究にかかわる研究の土台となります。そして、実践研究の成果が国会議員を含め高く評価され、国立特殊教育総合研究所の設立の契機となっていきます。



1960年代には光道園（1957年創立）において盲ろう者の入所が開始され、今日まで、一つの機関としては、日本で最も多くの盲ろう者の生活と仕事の場となり、盲ろうの専門性を蓄積してきています。1971年に国立特殊教育総合研究所が設置され、重複障害教育研究部に盲聾教育研究室が設けられ、3名の研究員が配置され、1973年には重複障害教育の実験学校として国立久里浜養護学校が設置、盲ろう教室が設けられます。1979年の養護学校義務化の中で盲ろうは独自の障害ではなく、重複障害の一部になります。

世界の動きとして、1960年代から1980年代にかけて、風疹の大流行がもたらしたものを押さえておく必要があります。風疹の世界的大流行により多くの先天性風疹症候群による盲ろう児が誕生します。沖縄を除き、日本は大きな流行を免れたのですが、1964年から1965年にかけてアメリカでは約2,500~3,000人の先天性風疹症候群の盲ろう児が誕生しました。この流行によって、「風疹協会」の名称で親と支援者の会がアメリカ、カナダ、イギリス等で設立され、各国政府への積極的な働きかけを行いました。その結果、制度が変更され、盲ろうの子どものための教育を行う盲学校や聾学校、あるいは学部の数が、アメリカおよびヨーロッパで広がります。具体的には、1967年に盲ろう児の支援についての法律がアメリカではじめて成立し、同年、盲ろう者と青年のためのヘレンケラーナショナルセンターが設立され、1975年には「全障害児教育法」（現在は「障害のある個人の教育法」）において盲ろうが独自の障害として定義され、今日に至っています。

日本と世界の動きについてポイントとなっている大きな動きをあげておきます。1960年代に盲ろう教育に関わる機関が、ICEVI（国際視覚障害者教育会議）の下部委員会として国際集会を開催していましたが、1976年にIAEDB（国際盲ろう教育協会）として独立し、1980年代には教育だけではなく、リハビリ、医療、家族、行政等、テーマが広がると共に、開発途上国への支援へと拡大し、1999年にDeafblind International（盲ろうインターナショナル）に名称が変更になりました。また、2001年の第7回ヘレンケラー世界会議で盲ろう当事者による世界盲ろう者連盟が設立され、国連において検討が始まろうとしていた障害者の権利条約の審議に盲ろう者の意見が反映されるように働きかけを行いました。

日本では、1987年に福島智さんが盲ろう者としては日本で初めての大学進学がきっかけとなり、1991年に社会福祉法人全国盲ろう者協会が設立され、日本における盲ろう者の福祉事業が始まりました。2001年に文部科学省がこれからの教育政策の指針を示した「21世紀の特殊教育の在り方」の最終報告書に関係団体の要望を受け、「盲ろう」の記述が入ったことは大きな意味をもつことでした。2001年の第1回世界盲ろう者連盟総会で福島さんがアジア地域の代表に選出され、アジア地域における盲ろう当事者組織の設立に向けた支援が開始されました。また、2003年には全国盲ろう教育研究会、盲ろう児とその家族の会「ふうわ」が、2006年には当事者団体の全国盲ろう者団体連絡協議会がそれぞれ設立されました。



そして、2007年には障害者の権利条約が採択され、第24条教育に「deafblind (盲ろう)」の語が入り、盲ろうがまだ障害として認定されていない国々への大きな後押しとなっています。2009年には東京都盲ろう者支援センターが設立され、2010年の障がい者制度改革推進会議に盲ろう者を代表して門川紳一郎さんが参加しています。

このように、日本と世界で展開していることが、互いに絡み合っていて、盲ろうを巡る大きな動きになっています。

次に、歴史を振り返る中で、そして今現在、盲ろう教育の研究者として、大切にしたいこと、出会いの中で確信したこと、変わったこと、願うことを挙げさせていただきます。

- (1) 梅津八三の実践と理論、今も盲ろうの子ども達と向き合うときに土台となっている考え方
山梨で行われた盲ろう教育の巨大な影響、プラス面とマイナス面を有していること
- (2) 1991年から1992年にかけてノルウェーにおいて在外研究をしたときにヨーロッパの盲ろう教育からコミュニケーション方法、見通しを立てやすくするための工夫などを学んだこと
- (3) 盲学校とろう学校での盲ろう教育、コミュニケーションに関わるいくつかの違いを学んだこと
- (4) 盲ろうの子ども「思い」と「気持ち」を大切にすること、中四国のお母さん方との出会い
- (5) 盲ろう者と通訳介助者との様子を見ることで得る気づきの大切さ
- (6) 興味関心を出発点にした教育は盲ろう教育の王道であり、近道であることの確信
- (7) 言語を獲得していない盲ろうの子どもへの通訳介助とは何かという問いかけ
- (8) 今、優先順位を高くすべきこととして、盲ろうの法的定義、保護者の要望を政府に伝えるルートづくり、手引書の作成、盲ろう教育担当教員の研修プログラム

盲ろうをめぐる歴史を俯瞰し、私の思い、伝えたいこと、今現在の課題と考えていることまでお話をさせていただきました。今後も皆様と共に歩み続けていきたいと思っております。

○ポスターセッション

乳幼児から学齢期の盲ろうの子どもたちへの支援、家族の会、海外の盲ろう

児と親の会の様子、そして、時計を初めとした日常生活品についてなど、さまざまなポスターが出されました。発表のあったテーマと発表者は以下の通りです。

弱視難聴乳幼児教育相談の一事例	淡路県民局県民室 淡路文化会館 熊田 華恵 氏
盲ろう生徒へのブレイルセンスの出張勉強会	筑波大学附属視覚特別支援学校 森 敦史 氏
盲ろう生徒への歩行指導 ～単独での買い物を目指して～ Y君への支援	筑波大学附属視覚特別支援学校 雷坂 浩之 氏
目と耳が不自由な子どもと その家族の会「ふうわ」	静岡県立静岡視覚支援学校 今村 光宏 氏
アフリカ ウガンダ 盲ろう児の状況と「親の会」	ふうわ会長 森 貞子 氏
盲ろう者のためのしっかりさわれる 触読式目覚まし時計	埼玉盲ろう者友の会・ヘリコプター 石田 良子 氏
視覚・聴覚障害の型が使いやすい 日常共用品	有限会社PJI 中野 真一 氏
	財団法人 共用品推進機構 森川 美和 氏

【8月9日】

○実践報告概要

「肢体不自由のある盲ろうの子どもたちの教育」

- ①三國 勝司 氏（横浜市立東俣野特別支援学校）
 - ②金子 亜子 氏（新潟県立はまぐみ養護学校）
 - ③宮崎 広子 氏（福岡市立東福岡特別支援学校）
- 以上の3氏からそれぞれ実践報告がありました。

①三國 勝司 氏（横浜市立東俣野特別支援学校）

平成17年4月、横浜市立中村養護学校（現：中村特別支援学校）への異動の年で、中学部1年の男子D君との出会いが盲ろうの生徒との初めての出会いでした。当初は、「盲ろう」に関する情報や予備知識が不足していたため手探りでの指導となりましたが、D君の心のうごきを表情から読み取ること、笑顔を創り出すような活動を心がけました。

朝の散歩では、植物の感触、香りや成長の様子を感じてもらえるようにしました。散歩コースの途中にまっすぐ朝日を受けるような場所がありますので、そこで車いすを止めて日の光を感じることで、日々変わる天気や太陽の存在を知らせました。鉄棒もコースに入っていたのですが、鉄棒を両手に握り前後に揺らしはじめ、それ

が一つの遊びになりました。

D君とのコミュニケーションは、D君のたたく「トントン…」を真似することから生まれました。D君がたたくと、それを真似して私もたたく、ということに気付いたD君は、たたき方に「指先だけ」、「強く」、「つまむように」など動きに変化をつけてくるようになりました。それにあわせて私も応えていきました。この「トントンコミュニケーション」は、私だけではなく、他の人にも拡がり、伝える楽しさ、伝わった喜びをD君だけではなく、教員も感じました。

6月に入って、国立特別支援教育総合研究所の中澤先生と出会い、サインとADLの重要性、「盲ろう」児にとっての担当者の存在、盲ろう児に関わるときの基本原則などを教えていただき、その後、10月に盲ろう児に関わる教員のためのモデル講習会に参加しました。初めて専門的な研修を受けましたが、そのプログラムの中の「盲ろう疑似体験」では、孤独感、集団の分かりづらさ等を改めて思い知らされ、介助者の「手」の重要性を実感しました。

そして、自分が感じたことを職場の仲間に伝えたいとの思いを強くもち、盲ろう児の有している困難さを実感し、より理解をすすめるために「盲ろう疑似体験研修」を職場で実施しました。

次に、私が担当したもう一人の盲ろう児M君の話しをしたいと思います。昨年4月、東俣野特別支援学校でM君を担当することになりました。

(Mくんの指導の実際について映像を提示しながら説明)

私が二人の肢体不自由のある盲ろう児を担当する中で、教員は盲ろう児の新しい概念の形成をしている役割、子どもと社会を繋いでいる役割を担っているという自覚をもつことが大切だということを感じました。

(自作教材の「サイン集」「盲ろう児のためのカレンダー」を紹介)

②金子 亜子 氏（新潟県立はまぐみ養護学校）

新潟県立はまぐみ養護学校は、新潟県立はまぐみ小児療育センターに併設された特別支援学校です。私は、盲ろうのHさんを小学部5・6年の2年間担任したのですが、今日は小学部6年時の活動・関わりを中心に報告します。

見えない、聞こえにくく、肢体不自由のあるHさんは、視覚からの情報入手が困難で状況が把握できない、手引き歩行は可能ですが独歩が難しい、自分の気持ちははっきりしているのに伝える方法が少なく、また支援者側の気持ちを伝えるのも難しいといった困難さを有していました。そして、不安であり、受け身になってしまう、自分から移動する気持ちがおきてこない、コミュニケーションの難しさがある状況で、安心できる学校生活であるために、自分の気持ちを表出できるように、自分の力を発揮できるようにと考え、以下の3点を重点に必要、適切な支援を考えていきました。

①Hさんにわかりやすい教室環境設定

②コミュニケーションがとれるように

③見通しをもって学校生活を送れるように

具体的には、教室環境について、Hさんが確認できて、わかりやすい空間・場所づくりに配慮し、触り心地、感触の違うマットや畳、反響板、好きなおもちゃの場

所を一定にした環境の理解と自発的な動きを促す支援を心がけました。コミュニケーションについては、Hさんと関わる時は、ネームサインで挨拶したり、場所や活動を示すオブジェクトキューと簡単なサインを組み合わせたりやりとりをするようにしました。また、右耳の聴力は60dB程度だったので、聴力も活用するために、わかりやすく聞き取りやすい言葉かけをしました。また、見通しをもって生活をするために、オブジェクトキューやカレンダーボックスを使い、一日の時程、学習を知らせるようにしました。

これらの取り組みの中で、Hさんが自分から場所を確認したり、動いたりする姿や自分の気持ちを表出し、YESとNOをはっきり伝えてくるような姿をみることができるようになってきました。全体的には、落ち着いた表情や笑顔で活動に取り組む姿が見えるようになってきました。

課題としては、中学部との連携と学習の定着、聴力の活用とコミュニケーション能力の向上、校内での共通理解と適切な支援のあり方についての共有などがあげられます。

③宮崎 広子 氏

(福岡市立東福岡特別支援学校 前：福岡市立南福岡特別支援学校)

肢体不自由児が通う特別支援学校である福岡市立南福岡特別支援学校に在籍している盲ろうのH君について報告します。H君は脳性まひ児です。

H君は、プールが大好きでしたので、プール学習の目標を探索活動において取り組んでみました。スロープや胸までの深いところを使って体を動かすことや、シャワー水の存在を知らせるなどの活動を行いました。これらの継続した取組の中でH君が見通しをもちはじめたり、人を求めるような様子もみられるようになりました。

しかし、働きかけがなければH君は外界に興味を失い、手を伸ばすことを辞めてしまうのではないかという不安を抱き、他機関や研究会等に出席する中で、国立特別支援教育総合研究所の中澤先生と出会い、モデル講習会に参加することになりました。H君が小学部4年生の時です。

事前にH君の1週間の生活記録をとる中で、よりH君の日頃の様子を知ることができました。また、盲ろうの疑似体験を行い、コミュニケーションのポイントをより深く知ることができました。以下の7つのポイントを丁寧に実践していきました。

- ①近くにきたことを知らせる。
- ②自分が誰かを名乗る。ネームサインをつくる。
- ③実物を触らせる、身体の部分に触るなどの方法により活動の予告をする。
- ④自分でやらせる。
- ⑤活動を拒否することも含めて選択の機会を与える。
- ⑥反応に応じる。フィードバックする。
- ⑦立ち去ることを伝える。

これら、モデル講習会の中で学んだことを実践することによって、少しずつではありますが、コミュニケーションがとれるようになってきました。

また、聾学校の先生方と話し合う中で、補聴器装用についても検討し、「きこえとことばの教室」の先生との出会いの中で、H君は補聴器を付けて過ごすことができるようになりました。装用すると、よく声が出るようになり、音を聞く様子などがみられるようになりました。

5年生からは担任を外れ、自立活動専科としてH君への取り組みを引き継ぎ、教員間で共有していくように努めました。また、保護者の方は「ふうわ」の会に参加したり、放課後支援事業を利用するなど関わりや活動が広がってきています。

○ワークショップ

以下の3グループにわかれましては。

①東京都盲ろう者支援センター見学

約30人で支援センターを見学してきました。最初に5分ほどビデオを見て、その後、前田センター長の説明を聞きました。センターは、昨年5月に設立され、主に東京都在住の盲ろう者のために、パソコン支援やコミュニケーション支援、生活支援などを行っているそうです。その他にも盲ろう者同士の交流を支援する学習会や通訳介助者の養成講座なども行っているそうです。東京都には、現在821名の盲ろう者がいるそうですが、通訳派遣を依頼されている人は、約一割にとどまっており、まだまだセンターの存在を知らない盲ろう者が少なくないとのことでした。

説明後、質疑応答を行いました。多くの質問が出され、時間が長引いてしまいました。質問の主な内容は、センターの設立経緯、職業訓練への見通し、他県からの利用の可能性、就労相談の内容についてなどでした。

その後、訓練相談室にある視覚障害者や聴覚障害者にとって、便利なグッズや調理器具、ルーペや拡大読書器、訓練に使っているパソコンなどを見せていただきました。

(文責：宇野 和博)

②盲ろうの子どもたちが理解しやすい環境づくり

保護者、施設職員、教員等26名の参加がありました。まずワークショップ担当者よりパーキンス盲学校のハンドブックの紹介があり、盲ろう児の教室環境を整える際の配慮事項（スケジュールボックス、活動コーナー、見て触ってわかりやすい提示、〇〇ちゃんの印）を学びました。次に、昨年の講演で報告されたアセスメントの内容をもとに、すずらんテープ（荷造りテープ）や黒画用紙を使って疑似体験グッズを作成しました。身近な盲ろう者の見え方にできるだけ近づけようと工夫している参加者が多かったようです。

その後、二人一組になり疑似体験をしながら、モデルルームへ移動。盲ろう者がどのように周りの世界を認識しているのかをイメージしながら教室環境を確認しました。一つのおもちゃの前から離れようとしない方、ちょっと手を触れただけで座り込んだまま動かない方…目を覆っていたテープを外すと、「怖かった」「動きたくなかった」など口々に感想を出し合っていました。

先発グループを待っている間、疑似体験グッズを



着用して部屋の中を移動してみたり、机上の文房具を見たり、実際にペンや色鉛筆で線を描いてみてどんな色が見やすいのか等を確認することもできました。

ワークショップを通して、黒地に白いカレンダーは良く見えること、床と壁の色のコントラストがないと空間把握が難しいこと、暗いところでの光の活用等を改めて認識し、子どもたちの見え方をできるだけ正確に把握し、環境づくりに活かしていくことの大切さ等を実感することができました。

(文責：西村 晴美 星 祐子)

③盲ろう児童生徒を初めて担当したあなたへ

参加者は8名でした。所属している特別支援学校の主たる障害種による内訳は、ろう1名、盲3名(内1名は図書室担当)、知的障害1名、病弱1名、肢体不自由1名です。

参加者が関わりをもつ盲ろうの子どもたちの状態および課題や関連する話題はとして以下のことが紹介されました。

- ・自傷行動があり、動きが機敏な中学部生徒とのコミュニケーション
- ・低体重出産による視覚と聴覚障害を有する幼児のコミュニケーション方法の選択として、サインと具体物としてどちらが適切か
- ・生活の見通しが立つようになって、多かった自傷行動がほとんどなくなった小学部児童について
- ・低酸素脳症により重度重複障害を有する児童で、見えているか聞こえているか、わからない児童とのかかわりについて
- ・肢体不自由と知的障害を有する高等部在籍の盲ろう生徒の認知力を高めることについて
- ・中学部の生徒に、「時間」と「明日」の概念を教えたいが、合図に対してすぐに行動を起こしてしまうため、どのような工夫があるか
- ・図書室に来る盲ろうの子どもたちに対してどのようなことが提供できるか

これらの情報を共有し、それぞれの課題に役立ちそうなことについて意見や具体的な実践例等を出し合って、話し合いを行いました。主たる意見や具体的な提案等として以下の点が出されました。

- (1) 盲ろう児への基本的な配慮としての、ネームサイン、日々のルーチン活動を始める前の丁寧な予告、当該児童の理解に合わせたサインや具体物の選択、盲ろう児の「ために」活動の準備等をせずできるだけ「共に」すること
- (2) 痕跡型の信号(実物、絵、文字等)と瞬間消失型の信号(身振りサイン、手話、音声のことば等)のもつ役立ち方の違い
- (3) 中枢性視覚障がいがある子どものための色をつかった視機能のアセスメント方法
- (4) 未来の予定を伝える方法等

(文責：中澤 恵江 柴崎 美穂)

○先天盲ろう児者の活動

参加者・・・盲ろう児者12名 兄弟姉妹2名
スタッフ・ボランティア・・・16名

この夏も、全国各地から盲ろうの子ども達と成人の先天盲ろうの方が12名集まりました。筑波大学附属視覚特別支援学校の幼稚部の教室が今回の保育室の拠点となり、2日間の活動が参加者それぞれのペースに合わせ、展開されました。お天気はちょっと曇り空で、猛暑と言われたこの夏にしては、過ごしやすき日でした。保

育室の様子をご報告します・・・。

◇ヨロシク！！

ボランティアさんはネームサインとなるアクセサリーを選び、身に付けてまずは自己紹介。ネームサインを盲ろう児に触ってもらい、「△△△です。よろしくねっ。」とご挨拶。やっぱり、少し緊張気味です。ここから、それぞれの活動、やりとりのはじまりです。

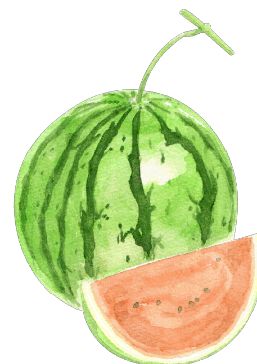
保育室前のグラウンドをボランティアさんと一緒に調べたYくん。iPodを巧みに操るWくんは、ボランティアさんにアプリを紹介していました。遠方から参加のKさん。移動の疲れもあったかと思いますが、おだやかに担当のボランティアさんとやりとりする姿には年長者の余裕すら感じます。(Kさんのサポートブックも大活躍)

Kくんとの関わりを楽しみに、中学生のTくんもボランティアとして参加です！

◇涙も素敵！！

ご両親と妹さんと4人で参加のRさん。講演会の会場は保育室から少し離れたところにあります。お母さんはRさんに離れる事を伝えます。ママのお話を聞きながらみるみる涙目になるRさん。ママのことばはしっかりとRさんに伝わっています。バイバイをしてお別れした後も、つらい気持ちをいっぱい表現し、ママを探してみました。とってもさびしかったけど、お外の遊動円木で揺れながら大好きなママを待ちました。

黙って離れることをしないママ、ママが大好きなRさんの涙、どちらも素敵です。



◇夏の定番！！

ウォーターベッド、ちっちゃいプールにおっきなプール、おやつはやっぱりスムージー。これらはみんな保育室の定番メニューです。もちろん、材料の買い出しも大事なメニューです。それぞれの盲ろう児者のペースで活動は選択、展開されます。KRさんは保育室でゆっくり過ごし、SくんとKさんはおっきなプールで、Kくんはちっちゃなプール、MさんとRさんは公園の噴水で、水遊びを楽しみました。そして、おやつスムージーとすいかをみんなでいただきました。夏はやっぱりこうでなけりゃ！！

ほんの一部分を報告させていただきました。ここに記しきれない細やかなやりとりがたくさん重ねられた2日間です。みなさん、またお会いしましょう！！

みなさんとの再会と、盲ろう教育研究会での新しい出会いを楽しみにしています。
(文責

: 井澤 素子)

●運営委員会・事務局より

会報の発行が大変遅くなりまして、申し訳ございませんでした。

3月11日の未曾有といわれる大地震で宮城県で盲ろう者の方が1名、岩手県では通訳・介助者の方が1名、亡くなられたと伺いました。心よりお悔やみ申し上げます。また、岩手県ではこのほかに、通訳・介助者3名の方が行方不明と聞いております。

社会福祉法人全国盲ろう者協会の以下のホームページに、大震災に伴う、各

地域の盲ろう者、通訳・介助員ならびに友の会等の状況が掲載されています。
<http://www.jdba.or.jp/saigai/saigai-index.html>

2013年に開催が予定されていた「第10回ヘレンケラー世界会議」がこのたびの大震災のため中止になりました。

第8回定期総会・研究協議会にご参加の皆様、お忙しい中、ありがとうございました。ボランティアの方々をはじめとして、多くの方々には、多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、温かなねぎらいや励ましのことばとともに、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。これからもより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しくお願いたします。

●会費納入のお知らせ

- ・2011年度会費納入時期は、2011年4月1日～6月30日です。
お知らせが遅くなり、申し訳ございません。
会費（年2000円）納入にご協力ください。
- ・2010年度分までの会費納入がお済みでない方は、2011年度分と併せて納入をお願いいたします。
- ・納入状況は、宛名ラベルに記載しています。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたらご容赦ください。
（例）2011未：2011年の納入をいただけていません。2011年度分2000円を納入してください。
（例）2009, 2011未（2010は済み）：2010年度はいただきましたが、2009年度、2011年度分は納入いただけていません。2009年度分、2011年度分の4000円を納入してください。

◇振込・振替先（みずほ銀行、またはゆうちょ銀行をご利用ください）

みずほ銀行 本郷支店
口座番号 普通預金 8062806
口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行
口座番号 00100-6-484136
加入者名 全国盲ろう教育研究会

●連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡ください。

<p>全国盲ろう教育研究会 第9回定期総会・研究協議会のお知らせ 日程：2011年7月30日（土）・31日（日） 場所：筑波大学附属視覚特別支援学校 （東京都文京区目白台3-27-6）</p>
--